



# いれずみ物語

— 4 —

小野 友道

## イ草作業のつらさと“そらうでいれずみ”

熊本県南部に広がる八代平野は肥沃である。豊稔になるイ草の生産日本一を誇るその八代の千丁町でイ草栽培が始まって、平成16年は500年の記念の年であった。町の大法寺の由緒書によると、永正2年（1505）、ここを治めていた上土城主岩崎主馬忠久公が、イ草栽培を奨励したのが始まりといわれている。イ草の植え付けは寒い冬に、そして刈り取りは真夏に行われる。

昭和30年代、神武景気で、イ草産業は盛りを極めていた。熊本大学の掲示板にもイ草刈りのアルバイト募集がひっきりなしであった。炎天下の作業に出かけた友達が、一様にそのつらさに音をあげ、もう二度と行かないと嘆いていたのを思い出す。イ草農家では毎朝4時に起きて、夜遅くまで作業に追まわれ、睡眠時間3、4時間だったという。イ草の重労働で手の関節がしばしば腫れ上がり、痛くて動かなくなる。特に刈り取り作業では左手関節を痛めることが多かったらしい。このような状態をこの地方で「そらうで」と呼び、その痛みをとるために、手首にいれずみをする習わしがあった。

今でも大学病院の外来で時々手首に小さな丸

い青い点をもった八代のおばあちゃんを診察することがある。八代で皮膚科を開業している岡崎美知治先生に、この手首の情報をお願いしたところ、あつという間に数例の「そらうでいれずみ」（著者が勝手にそう呼んでいるのであるが）のある通院患者からいろいろ聴いていただき、その写真も送ってくれた。このいれずみはイ草作業に限らず、左官などの労働で手が痛くなれば、近所の専門家と称する人あるいは家族が裁縫に使う針を数本から10本程度糸できつく縛り、火であぶった後、墨につけ、皮膚に刺入するのだという。針束の先端から数ミリのところも糸で縛るのは、針が深く入らないようにとの工夫だった。手を組み、反対側の人さし指の先端が当たる部位が「そらうで」治療のツボだそうで、経穴「外関」あるいは「中泉」に当たる場所かもしれないが、そこに普通は3回ほど刺していた。

このような民間治療は珍しいのだろうか。沖縄でもいわゆる女性の風俗習慣としての針突とは別に、カヤ（神経痛）の治療にやはりいれず

## いれずみ物語

みが行われていた。与那国のある女性は、40歳ころ過労で右手が動かなくなり、右肩から腕、指へといれずみをした。その女性の肩には大小の点が10個ばかり、肘に2個、尺骨頭部付近に3

個、指は第2、3、4指に太い線があったが、いれずみのお陰で神経痛は治ったそうである。

一方、アイヌでも男女に限らず痛みの局所を刃物で傷をつけ、血を出し、その後に鍋墨を擦り込んだという。坪井はこれもいれずみと考えた。もっともアイヌでは女性がいれずみをすれば悪い病気になるまいといわれ、頭痛・眼病などもいれずみをすると治るといわれていた。外国でも例えばパプア島でも治療としてのいれずみが行われ、歯痛・マラリア・リウマチに有効とされた。さらに古くから、キリスト教、イスラム教あるいはユダヤ教などでは、いれずみが禁止されていたにもかかわらず、リウマチ治療のためいれずみが行われたという。それほどまでにいれずみの効果が信じられていたのだろうか。

ところで、1991年9月19日に、オーストラリアとイタリアの国境付近で発見された凍結ミイラにもその痕跡が見られた。このミイラ、5000年前の男として注目されたのを記憶されている読者も多いであろう。この遺体の皮膚に何らかの「印」があることが、発見直後から知られていた。その個所は左手首平行線2本、背骨の左側平行線の東4カ所、背骨右側平行線の東1カ所、右膝内側十字形1つ、左ふくらはぎ平行線の東3カ所、左アキレス腱の左小さな十字形、右足甲平行線東1カ所、右足踝横平行線東1カ所、右足内踝上平行線東1カ所で、左手首のそれは紐による鬱血であったが、その他は青色の目立ついれずみと考えられた。先のとがった道具で皮膚を傷つけ、そこに唾液か淡水のぬるま湯で溶かした炭の粉を擦り込んだらしい。背中のそれはかなり正確に線が引かれてあり、自分で彫ったのではないと推測された。それらがバジリクで見つかった男性の「点」のいれずみの分布と驚くほど似ていることも指摘されている。また、その分布から民族医療ではないかとの指摘が記載されている。さらにこの遺体のレント



“そらうで”の治療として“いれずみ”を行ったイ草農夫の手関節（岡崎美知治原図）

ゲン写真の所見で「中程度の変性が見られ、骨軟骨症ないしは軽い脊椎症と思われる。また、膝と両足かかと付近の距骨関節には中程度の消耗が見られる」という結果がでていいる。それで、いれずみの個所と、骨部の消耗との間に関連があると見ている。しかしふくらはぎには骨の異常はなく、おそらく登山などでの筋肉痛で悩んだ可能性が書かれている。その後、赤外線と赤色フィルターを使った写真撮影から計57カ所のいれずみが見つかり、「それらが変形した関節付近に施されているので、お灸説がますます有力になっている」と、この男を書いたシュピンドラーが後書きに付記している。

鍼による治療といれずみで付記しておかねばならない事例がある。

日本大学教授鈴木啓之先生の発表論文にある41歳の女性は、21歳時に、喘息の治療として2年かけて300本の金色の鍼を額、首、胸などに埋め込まれた。その1年後に彼女は初めて首の青黒色の斑点に気づいた。初診時3ないし5ミリの大きさであった。X線検査でたくさんの細い鍼様の線状物質が認められた。取り出された鍼からの分析結果、銀と銅が検出された。皮膚の色はこの銀が、硫化銀として真皮に沈着して生じた銀皮症と診断された。ちなみに金はごくわずかに検出されたのみであった。これは銀による銀皮症であるが、やはり一種のいれずみといえる。すさまじい治療ではある。

さて、かように古今東西広く行われて来たいれずみによる痛みの治療は、何を意味しているのだろうか。その効果は確かなのか。針だけではいけないのか。金属製の細い針を用いた鍼は中国で生まれ、2000年前の戦国時代に著された『黄金内経』によりそれが系統だてられたという。身体の一部を刺激することにより痛みを和らげる効果が、1965年MalzackとWallにより

gate control説として提唱されると、鍼灸などが俄に現代医学のなかで光を浴びるようになっていった。1997年にはNIHの会議で、鍼の臨床研究の多くはデザイン・サンプルなどに不備が多い状態ではあるが、頭痛などの痛みの代替療法として有用性が期待されるとの声明がなされた。

鍼による疼痛の軽減は、身体の一部の疼痛閾値を上昇させて、無痛状態を得るというものである。内因性オピオイドの放出が起こり、その結果、下行性疼痛抑制系を賦活させる。自律神経を介する血流改善、筋緊張低下による疼痛軽減なども挙げられている。たしかに鍼は有効としよう。しかし、なぜいれずみなのか。それは確かな鍼療法の印としての刻印なのか。より強いおまじない効果が付与されるのか。はたまた墨などが挿入されたことが痛みの軽減と関係があるのだろうか。いずれにせよ、昔の人の知恵軽んずべからずである。

イ草作業で動かなくなった「そらうで」にいれずみを入れ、次の朝、青いその印を確かめて、彼らはまた田んぼに出かけて行くのである。夕べの痛かったあのいれずみは、きっと効いたに違いない。

稿を終えるに当たり貴重な情報と写真を提供してくださった岡崎美知治先生、ならびに痛みについてご教示いただいた、熊本大学大学院 生体機能制御学 牛島一男助教授に深謝する。

(熊本大学 理事・副学長)

## 主要文献

- 1) 岡崎美知治：私信。
- 2) 大沢秀雄、佐藤優子、志村まゆら：鍼灸療法、ペインクリニック、21；173、2000。
- 3) 熊本日日新聞：「イ草栽培500年 千丁町」、平成16年12月7日。
- 4) 磯川全次：『刺青の民俗学』、批評社、1997。
- 5) コンラート・シュピンドラー（畔上司訳）：『5000年前の男』、文春文庫、1998。
- 6) 鈴木 太：末梢の刺激による鎮痛法、ペインクリニック、16；177、1995。
- 7) Suzuki H, et al.: J Am Acad Dermatol, 114；373、1993。
- 8) NIH Consensus Development Conference on Acupuncture. Nov. 51-53, 1997。
- 9) Melzack R, Wall PD: J Dermatol Surg Oncol, 5, 851, 1979。
- 10) 吉岡郁夫：『いれずみ(文身)の人類学』、雄山閣出版、1996。